



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『心中天の網島』の「意見」と背景：構想を起点として
Author(s)	富田, 康之
Citation	北海道大學文學部紀要, 45(1), 57-75
Issue Date	1996-08-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33673
Type	departmental bulletin paper
File Information	45(1)_PR57-75.pdf



『心中天の網島』の「意見」と背景

— 構想を起点として —

富 田 康 之

はじめに

近松門左衛門の世話浄瑠璃のテーマの一つとして、「家」の問題がこれまでも指摘されてきた。例えば、原道生氏は「近松世話浄瑠璃の評価の問題」（『日本文学』昭和三十八年六月号）の中で、

作者は次第に、主人公の連なる人間関係が、主人公を生かすと同時に疎外して行くという事態に気づき、その認識の深化に応じて、更に新しい人間関係を描き出して行くという発展をとって行ったのだと思う。その過程で明らかにされてきたのが、町人の「主従」であり、町人の「家」の問題だった。〈中略〉後者は、殆ど全作に出て来るが、『心中天網島』などを頂点としている。

『心中天の網島』の「意見」と背景

と言っている。この論文が書かれた後は、「家」の問題が近松の世話浄瑠璃全般に関係していた為か、『心中天の網島』を単独に扱う論考には、義理と情との問題に力点を置いて論じられるものが多かった。^(注1)特に、中之巻に於けるおさんの手紙告白の一件が、「女同士の義理」の問題として論究されてきたのである。その後、諏訪春雄氏は『心中天の網島』について、「家と個人の対立」という見方を指摘している。^(注2)近松が『心中天の網島』に義理、若しくは義理と情とを重要な主題としたという捉え方は、異論の無い所である。しかし、『心中天の網島』における「家」の問題と言う時、具体的にそれがどのような構想として成立しているのかは検討しておくべき課題であると考ええる。その為に、まず全体の構成を検討する事から始めたい。

一 作品構想について

全体の枠組みを把握する為に重要なプロットによる構成の概略を示してみたい。

〈上之巻〉 大坂曾根崎新地茶屋河庄の場

- ① 曾根崎新地の賑わい
- ② 小春と太兵衛のやりとり
- ③ 小春と侍客のやりとり
- ④ 治兵衛登場

- ⑤ 侍客の小春への意見
- ⑥ 括られる治兵衛
- ⑦ 太兵衛の横暴
- ⑧ 正体表わす兄孫右衛門
- ⑨ 兄の意見
- ⑩ 起請の取り戻し
- ⑪ 離別

①は曾根崎新地の様子が描かれ上之巻の場所設定がなされる。②は、作品の構想上から見れば、小春と治兵衛の置かれた状況を観客へ説明する場面と言える。

③と⑤の間に④の治兵衛登場の場面が割り込んで仕組まれる。これは⑤での侍客と小春とのやり取りを後の展開の為に立聞きしなければならぬからである。よつて、③と⑤は連続して展開するものである。③で、小春が侍客に「十夜の内にしんだ者は。仏に成といひますが定かひな。」^(註3)「じがいすると首くゝるとは。さだめし此のどを切ルかたが。たんといひでござんしよの。」等の発言を⑤で受け、侍客が小春に心中する決意を見て取り、意見するものである。文中には、「くはしやが咄の紙治とやらと。心中する心と見た。ちがふまい。しに神ついたみゝへは。ゐけんも道理も入まじとは思へ共。さりととはぐちのいたり。」とあり、心中を回避するように説得する。小春はその意見に従い、心中せずに済む様に侍客に頼むことになる。尤も、小春の真意が別物であることは後に明かされる。

⑥は⑤での小春の心変わりに怒った治兵衛が抜身の刀を格子の狭間から突つ込み、侍客に腕を括られるというものである。⑦での、太兵衛に盗みをして縛られたと極めつけられ、暴行を受けるといふ筋の契機となる。⑧は⑦を受けて、侍客が太兵衛を懲らしめ、続いて治兵衛に兄孫右衛門であると正体を明かす仕組みとなる。続いて⑨では、孫右衛門が治兵衛に意見する場面となる。文中には、「弟とはいひながら三十におつかり。へ中略へ身だいつぶるゝわきまへなく。兄のいけんをうくることか。」とある。その結果⑩での治兵衛と小春の起請の取り戻しが行なわれる。ここでおさんの手紙から孫右衛門が小春の真意を悟ることになる。⑪では二人の離別が展開され、上之巻が終わる。

上之巻で中心的に描かれる人物は、侍客として登場する粉屋孫右衛門と小春、治兵衛であろう。この三人の行動を中心に考えれば、構想として同じ仕組みが二度繰り返されていることに気付く。即ち、侍客が小春に意見し、小春がそれに同意する出来事(⑤)と、更に孫右衛門が弟治兵衛に意見し、同じく同意して改心する仕組み(⑧)である。前者の場合、小春はおさんの手紙に既に同意しており、始めから治兵衛と別れるつもりであった。よって侍客の意見に従って改心し、心中を取り止めたものではない。しかし、それが観客に知らされるのは⑩の段階であり、それまでは侍客の意見によって改心したという仕組みである。あくまで表向きの仕組みは「意見」から「改心」へと展開しているのである。後者の場合、小春の真意を知らない治兵衛は小春を見損ない、孫右衛門の意見を受け改心する仕組みになっている。上之巻は、「意見」から「改心」という仕組みの繰返しが基本構想となつて展開していると言えよう。次に中之巻を見てみたい。

中之巻 へ天満宮前町紙屋治兵衛内へ

- ⑫ おさんの切盛り
- ⑬ 三五郎の道化
- ⑭ 孫右衛門と叔母登場
- ⑮ 孫右衛門と叔母の意見
- ⑯ 誤解を解く治兵衛
- ⑰ 起請を書かせる叔母
- ⑱ 孫右衛門叔母退場
- ⑲ おさんの手紙の告白
- ⑳ 身請け金を調えるおさん
- ㉑ 舅五左衛門登場
- ㉒ 去り状の責めと詫び言
- ㉓ 連れ去られるおさん

⑫、⑬は中之巻の場所設定と三五郎の道化が展開する導入部分である。

⑭から⑲は一連の展開である。孫右衛門と叔母が登場し、いきなり叔母がおさんへ意見を始める。意見が終わると

同時に、今度は孫右衛門が治兵衛に意見する。叔母と孫右衛門は、講仲間の噂話から、治兵衛が小春を請け出すものと早合点して来たものであつた(15)。治兵衛は身請けする人物が太兵衛であると思ひ当たり、弁明をする。おさんも治兵衛の言い分が正しいと請け負ひ、その場は納まる(16)。叔母は念の為に嘘偽りが無いことを起請に書かせ(17)、叔母の夫五左衛門に起請を見せに孫右衛門と共に退場する(18)。

叔母と孫右衛門が帰つた後、治兵衛が漏らした「たとへこなさんと縁きれ。そはれぬ身に成たり共。太兵衛には請出されぬもしかねぎで親かたからやるならば。物の見ことに死んで見しよ」という小春の言葉から、おさんは小春が死ぬ事を確信し、手紙の一件を告白する。治兵衛と小春の手を切らせたのは、おさんの小春への手紙が原因であつたというものである(19)。そこで二人は狼狽し、小春の身請け金の工面をつける(20)。

治兵衛は家を出ようとすると、折悪く舅五左衛門がやつて来る(21)。五左衛門の目的は、治兵衛が書いた起請の真実を確かめる事であつた筈である。ということは、孫右衛門と叔母が来た時の目的と同一線上にあると言つてよい。孫右衛門と叔母はそのために意見を試みた。ところが、五左衛門の場合、出会した治兵衛の姿をみて、完全に誤解してしまつたのである。五左衛門は治兵衛の姿を見て「むこどの是はめつらしい上下きざり。わきざしはおありあつはれよいしゆのかねつかひ。紙屋とは見へぬ。しんちへの御出か御せいが出まする。」と言う。状況から見れば五左衛門の勘違いも尤もなことであつた。この状況が、「意見」という段階を飛び越え、「離縁」という結末に一氣に導いたのである。

治兵衛は五左衛門に詫びるが、聞き入れられない。おさんも五左衛門に抵抗するが、五左衛門は去り状を書くように責める。極まつた治兵衛は自害を試みるが、おさんに止められる。五左衛門は何も聞き入れず、おさんを無理やり

連れ帰る(22)。

中之巻の構成は、三つの仕組みから成り立っていると捉えることも可能であろう。第一は叔母・孫右衛門の意見の場であり、第二はおさんの手紙の告白であり、第三は五左衛門のおさんを連れ去る事件である。中之巻の山場は勿論手紙告白の一件であることは間違いないだろう。「女どしのぎり」を触れる研究は多い。しかしその「女どしのぎり」を展開するための仕組みは、孫右衛門・叔母の意見であり、その延長上に立った五左衛門の暴挙とも言うべき行為であった。

下之巻へ蜷河新地茶屋大和屋・道行名残の橋づくし・大長寺敷外の水門へ

②4 治兵衛茶屋大和屋を出る

②5 兄孫右衛門の尋ね

②6 治兵衛と連れ立つ小春

②7 へ名こりの橋づくしへ

②8 義理立ての後心中

治兵衛は小春と心中する心で、大和屋をまず一人で抜け出す(24)。次に小春を連れ出そうとしている所へ、孫右衛門が治兵衛を捜しにやってくる。先に気付いた治兵衛は身を忍ばせる。ここで孫右衛門は治兵衛に会う事はなかった。心中しなければならない構想から見れば、ここで二人が会うことは出来ない。すれ違っていく仕組みなければならなかった。

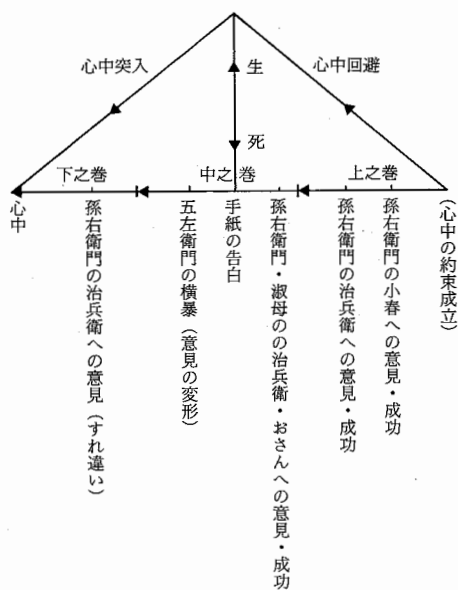
た(25)。孫右衛門が退場し、治兵衛と小春は連れ立って心中へと急ぐ(26)。道行へ名こりの橋づくし(27)があり、心中場へ辿り着き、二人で命を断つ(28)。

心中浄瑠璃の場合、通常下之巻は道行が仕組まれた後、心中する場面が仕組まれる。『天の網島』も同様の形式より成る。ここで注目したいのは、道行前での孫右衛門登場の意味である。孫右衛門は、治兵衛が「我身をわすれ。むふんべつも出やうかと。おけんのたねに勘太郎を。つれて尋」ねて来たのであった。即ち、治兵衛に「おけん」する目的であった。すれ違いにより、その意見の試みは徒労に終わるが、全体の構想から見れば、上・中・下巻の全てに「意見」の場面が繰返し仕組まれていることが指摘できるのである。

これまでも、『天の網島』に於ける「意見事」は指摘されている。しかし、それらの指摘は上之巻、あるいは中之巻での孫右衛門の治兵衛に対する「意見」についてであった。作品全体が「意見」の繰り返しという構想であるとの指摘はない。

さて、作品全体の構想を把握してみたい。まず、手紙の告白(中之巻)及び心中(下之巻)の件りを除けば、「意見」の場面を繰返し仕組むことにより、劇の展開を図るものであると言える。中之巻の三場面の間にある手紙告白の事件は、正に作品全体の中央に位置していると言える。そして手紙の事件の前と後では、意見の効果が全く逆転していると考えられる。手紙事件の前では、孫右衛門・叔母の意見が心中を回避する方向で働いている。ところが、手紙事件の後では、五左衛門の「意見」が変形した形で展開される。それは心中回避への方向性を持たず、逆に心中への推進力となった。また下之巻では、確かに孫右衛門の意見は物陰に隠れた治兵衛の耳に届いたが、すれ違いの為に意見の効果が十分に発揮された訳ではなく、心中を思い止まらせるまでには至らなかったのである。以上を図式化すると

次の様になろう。



以上から見れば、治兵衛の周囲の人物が、治兵衛・小春・おさんに対して意見をするという構想の繰返しが中心的な仕組みであり、「意見」の内容を中心に考察する必要があるように思われる。

二 一家一門と血縁

意見をする者と、される者との確認をしてみたい。

上之巻

⑤ 粉屋孫右衛門↓小春

⑨ 粉屋孫右衛門↓治兵衛

中之巻

⑮ 叔母・粉屋孫右衛門↓おさん治兵衛

⑳ 舅五左衛門（暴拳）↓治兵衛おさん

下之巻

㉔ 粉屋孫右衛門↓治兵衛（すれ違い）

これらの意見は、直接的には孫右衛門なり、叔母の意見ではあるが、果して個人的な意見なのであろうか。上之巻⑨での孫右衛門の意見には次の様にある。

しうとはおばむこ。しうとめはおばじや人親同然。女房おさんは我ためにもいとこ。むすび合く重々の縁じや親子中。一家一もんさんくはいにも。おのれがそねざきかよひの。くやみより外よのことは何もなひ。

「一家一もんさんくはいにも。おのれがそねぎきかよひの。くやみより外よのことは何もなひ。」とは、「一家一もん」の全ての人々が治兵衛と小春の縁切りを切望している事と理解できる。そう考えれば、孫右衛門の意見は孫右衛門一人のものではなく、「一家一もん」の総意を代弁していると捉える事も可能であろう。

もう一つ、中之巻⑮での叔母の言葉に注目したい。

ヲ尤々此氣になればかたまるあきなひことはんじやうしよ。一門中がせはかくも皆治兵衛為よかれ

ここでも「一門中がせはかくも皆治兵衛為よかれ」と言う。叔母の個人的な意見ではなく、「一門中」の総意をその背景に持っているといえられる。孫右衛門と叔母との両者の言葉から考えれば、どちらも個人的な意見ではなく、「一家一もん」の総意としての意見であると言えよう。この「一家一もん」という語は、意見の場面では決まり文句の様に使われている。例えば、上之巻⑤での孫右衛門の小春への意見には次の様にある。

くはしやが咄の紙治とやらと。心中する心と見た。ちがふまい。しに神ついたみゝへは。ぬけんも道理も入まじとは思へ共。さりととはぐちのいたり。さきの男の無分別はうらみず。一家一もんそなたを恨にくしみ。万人に死顔さらす身の恥。親はないかもしれね共。もしあればふかうのばち。仏はおろか地こくへもあたゝかに。ふたりづれでは落られぬ。

身分を侍と偽った孫右衛門は、「さきの男の無分別はうらみず。一家一もんそなたを恨にくしみ。」と意見した時、勿論一般論としての見解ではあるが、具体的には孫右衛門の「一家一もん」を意味している筈である。また、下之巻⑮の孫右衛門の言葉には、

一門一家親兄弟が。かたづをのんでさうふをもむとはよもしるまい。しうとの恨に我身をわすれ。むふんべつ

も出やうかと。ゐけんのたねに勘太郎を。つれて尋るかひもなく。今迄あはぬは何ごと。おろく涙のひとりこと

とある。「一門一家親兄弟が。かたづをのんでさうふをもむとはよもしるまい。」という表現も、孫右衛門が「一門一家」の心情を代弁したものである。

以上から考えれば、意見をする者である孫右衛門なり叔母なりの意見は、個人的な見解というよりも、一家一門の総意としてのものと考えられる。この事と関連して、詞章の中には「一家一門」の語の他に、血縁関係を強調する語句が非常に多い。上之巻⑨での孫右衛門の意見の中で、

弟とはいひながら三十におつかり。勘太郎お末といふ六ツと四ツの子の親。へ中略しうとはおばむこ。しうとめはおばじや人親同然。女房おさんは我ためにもいとこ。むすび合く重々の縁じや親子中。

とある。また、中之巻⑮で叔母の言葉には次の様にある。

そなたのてゝごはおばが兄。いとしやくはうよ道せいわうじやうの枕を上。むこもおい也治兵衛がこと頼むまた上之巻では、太兵衛が小春に治兵衛の悪口を言う時にも、「紙屋の治兵衛ふたりの子の親。女房はいとこどししうとはおばむこ」とあり、「一家一門」を外れた人物からも治兵衛の血縁関係の語句が語られるのである。観客に、治兵衛を取り巻く環境が、血縁に縛り付けられていることを繰り返し強調するのである。では、一家一門の総意とは、具体的には一体何を意味しているのであろうか。その点をもう少し詳しく意見の中から考えて見たい。

三 「意見」の背景

上之巻⑨で、孫右衛門が治兵衛に対して次の様に言う。^(註)

A 弟とはいひながら三十におつかゝり。勘太郎お末といふ六ツと四ツの子の親。

B 六間口の家ふみしめ。身だいつぶるゝわきまへなく。兄のいけんをうくることか。

C しようとはおぼむこ。しようめはおばじや人親同然。女房おさんは我ためにもいとこ。むすび合く重々の縁じや親子中。

D 一家一もんさんくはいにも。おのれがそねざきかよひの。くやみより外よのことは何もなひ。

E いとしひはおばしや人へ中略おのれが恥をつゝまるゝ恩しらず。此ぼちたつた一ツでも行ききにまとか立。

F かくては家も立まじ。小はるが心てい見とゞけ。其上の一思案おぼの心もやすめたく。此ていしゆにぐめんし。

おのれが病のこんげん見とゞくる。へ中略小腹が立やらおかしいやら。胸がいたい

この箇所に関して、諏訪春雄氏は六つの部分に分けて分析している。次にそれを引用し、その分析に則つて考察してみたい。

A まず、勘太郎六歳、お末四歳という二人の子供がいるということ。

B 一軒の店の主人であるということ。

C 複雑な親類関係にとりまかれていたということ。

『心中天の網島』の「意見」と背景

D その複雑に入組んだ親族たちが治兵衛の行動を非難しはじめているということ。

E 肉親の愛情をふりかざして治兵衛の感情に訴えかけているということ。

F 六つめに關しては、諏訪氏は「これでは家も保てない。小春の心底を見届け、……胸が痛んでどうにもならぬ」と現代語訳した後、「ここで孫右衛門は、自分のことを言っている。いままで六つの部分に分けて、順を追って孫右衛門の意見の内容をみてきた。その最後に孫右衛門は自分のことを持ち出した。」と言っている。

孫右衛門の意見を見ているにいきなり、諏訪氏は、A、Bで、「治兵衛に、親として、一家の主人として、多大の責任を負わせるものであった」とする。なるほどその通りであるが、A、Bとの内容には若干の差異があるように思われる。Aは治兵衛の家族に於ける立場を自覚させようとの発言である。女房・子供のある身での無分別を戒める内容である。即ち、小春との縁切りには有効な表現内容となっている。諏訪氏も「治兵衛のもっとも痛いところをついてきたのである」と言っている。しかしBは、放蕩を続ける結果、破産へと進むことの自覚の無さを指摘しているのである。その自覚の無さが、「兄のいけんをうくることか」との孫右衛門の叱咤へと続くのではなからうか。

孫右衛門の意志が、一家一門の総意としてのものではあれば、小春と治兵衛との縁切りを目論むものである。そう考えれば、一見、Bの「六間口の家ふみしめ。身だいつぶるゝわきまへなく。」という発言は、挿入的な意見として捉えられるようにも思われる。つまり、AからCへとそのまま詞章を続けたとしても、小春との縁切りには十分な内容である。では、縁切りの説得として核心的ではない二次的な内容を、何故敢えて付け加えたのであろうか。この問題の前に、C以降の詞章についても考察してみたい。

Cは、一家一門に於ける治兵衛の位置を確認する内容である。これはAでの、家族に於ける位置の確認の延長上の発言と捉えられる。そうであれば、Aと同一内容の繰り返しと言えよう。血縁関係を背景にして治兵衛を説得しようとする態度である。D・Eは一家一門が具体的に治兵衛を心配する内容で説得しようとするものである。特に、治兵衛に対してEの叔母の具体的行為の説明は最も効果的な説得となる筈である。ところが、そういう効果的な説得の後に、Fの冒頭で「かくては家も立まじ。」という言葉が続くのである。「かくては」という語が、それまでの説得を総括して述べる働きをするならば（本来この一文は、Eの中に入れられるべきであろう）、孫右衛門を始めとする一家一門の集約的な意見は、小春との縁切りを前提とはするものの、へ家を立てよという一点に尽きることになる。この文脈は、A・Bで、小春との縁切りをして「身だいつぶ」すな、とする展開を再度繰り返したものと読み取れる。この関係からもう一度説明するならば、「身だいつぶ」さず、「家」を「立」てよという事が、一家一門の意見であつたと考えられよう。

中之巻(15)では、叔母が自分の娘であるおさんに対し次のように言う。

男の性のわるいは皆女房のゆだんから。しんだいやぶりめをとわかれする時はおとこ計の恥じやない。少めを
あいて気にはりをもちやいの

この文脈も「男の性のわるい」ことが、結果として「しんだいやぶ」る事態を招き、その為に「めをとわかれする」ことになるというものであろう。とすれば、「めをとわかれする」原因が治兵衛とおさんの不仲などという問題ではなく、あくまで「しんだいやぶ」ることなのである。

この後孫右衛門の意見が続き、更に小春の身請け客の誤解が解ける。そこでその証拠の為に起請が書かれ、叔母は安堵して次の様に言う。

ヲ尤々此氣になればかたまるあきなひこともはんじやうしよ。一門中がせはかくも皆治兵衛為よかれ。兄弟の孫共のかはいさ。

ここで言う、「此氣になればかたまる」とは、身持ちも固まるという意味である。小春との縁切りを確認するだけならば、この「かたまる」という表現で完了されるべきものであろう。ところが、すぐに「あきなひこともはんじやうしよ」と続けられる。孫右衛門の言葉と併せ考えれば、一家一門の総意の背景には「しんだいつぶ」さず、「家」を「立てる為」、「あきなひこと」を「はんじやう」させることであつた。この事が、夫婦仲の良好な関係を維持する為の基本的な姿勢であると考えていたのである。

ところで、一家一門の総意について、観客はどのように受け止めていたのであろうか。それはまさしく正しいものとして肯定した筈であろう。治兵衛の一家一門があまりにも非道な考えならば、決して葛藤は生まれる筈もなく、無批判に治兵衛を応援する側に回つた筈である。しかし、そうではなからう。一門の「家」を「立」てる為、「あきなひこと」を「はんじやう」させるといふ、謂わば誰しも従うべき生き方としての総意が妥当なものであるだけに、どうしようもない治兵衛の状況を哀れむ様に見守つていたと考えられる。そう考えるならば、一家一門の総意とは、観客の考えをも含んだ総意であつた筈である。同じく近松作の『山崎与次兵衛寿の門松』（享保三年正月）では、浄閑は、

侍の子は侍の親がそだてゝ。武士の道をおしゆるゆへに武士と成。町人の子は町人の親がそだてゝしやうはいの道を教ゆるゆへに商人と成。侍は利徳を捨て名をもとめ。町人は名を捨て利徳をとり金銀をためる。是が道と

申もの。

と言う。「あきなひこと」を「はんじやう」させるといふ考えは、「利徳をとり金銀をためる」といふ事と同意で、當時の町人の生き方の根本であり、「道」であつた。

おわりに

上之巻の場合、孫右衛門の小春に対する意見は、元々おさんの手紙によつて小春が別れを決意していた為、対立關係が生じていない。また、上之巻での孫右衛門の治兵衛に対する意見では、小春の見せかけの縁切りを信用した治兵衛が孫右衛門の意見を聞き入れ、一家一門の総意へ従ふことになる。依つてここでも極限的な対立關係は生じていないのである。表面上、小春の葛藤が強調されている訳ではない。治兵衛にしても、立聞きの場合での心理は葛藤というよりもむしろ怒りである。観客は上之巻の最終局面まで小春を不実な女性として認識している。活躍するのは侍の扮装までした孫右衛門の様にも見える。では、上之巻が単なる事件の進行の爲の構想であるかと言へば、勿論そうではなからう。最終局面で、おさんの手紙を孫右衛門が見付けた時、孫右衛門はすべてを理解し、次の様に言う。

是小はる。さいぜんは侍めうり。今は粉屋の孫右衛門あきないめうり。女房かぎつて此ふみ見せず我一人ひけんして。きしやう共に火に入ル。せいもんにちがひはない。

それに対して小春は、「ア、忝い。それでわたしが立ます」と答える。小春のおさんへの義理立てが、この時観客に知らされることになる。不実な女性との思いが強かつた分、小春の心底の苦しさが際だつて印象付けられる。おさんへ

の義理立てに対する葛藤は直接描かれる事はないが、不実さという行為が却って小春の葛藤を最も効果的に表現していると言える。上之巻は、おさんへの義理立てにより治兵衛と離別した「小春の悲劇」を描いたものと捉える事も可能であろう。

中之巻、最初の孫右衛門と叔母の意見の場面では、小春の身請けの相手が治兵衛ではなく太兵衛であると分かり誤解が解け、ここでも治兵衛・おさんは一家一門の総意に従う行動を取る。ところが、孫右衛門、叔母が帰った後、ふとした治兵衛の発言から事態は一変する。小春が太兵衛に請け出されれば死ぬ覚悟であると治兵衛から聞いたおさんは、小春に宛てた手紙の一件を告白するのである。おさんは、「ア、悲しや此人をころしては。女どしのぎりた、ぬまづこなさんはやういて。どうぞころしてくださるな」と言う。また、小春を身請けした後の身の振り方を聞かれた時、「アツアそうじゃ。ハテナんとせう子共のうばか。まゝたきか。ゐんきよ成共しませう」と答える。小春がおさんに義理立てして治兵衛と手を切ったように、おさんも「女どしのぎり」を立てる為に悲壮な決意をする。ところが、後に舅五左衛門が登場し小春を救う計略が打ち壊されてしまう。更におさんは、むりやり五左衛門により治兵衛と離縁させられる。

上之巻では、孫右衛門が治兵衛を小春から引き離し連れ去るのであるが、中之巻では、五左衛門がおさんを治兵衛から引き離す。孫右衛門は治兵衛・おさん・小春の状況を理解した上で離別させるのであり、治兵衛・小春の心中を回避する方向に働きかける役割である。五左衛門はそれとは逆に、状況を全く把握出来ずにおさんを連れ帰るのであり、これは治兵衛・小春の心中を決定付ける役割を果たした。また、上之巻では小春の葛藤を間接的な描き方で表現したのに対し、中之巻では、手紙の告白を頂点とする直接的な描き方がなされている。このように捉えれば、全く対

照的な描き方ではあるが、基本の構想は同様であるといつてよい。中之巻は、おさんが小春への「女どしのぎり」を立てる為に手紙の一件を告白し、それに端を発して、偶発的とは言え、自分の父親に治兵衛と離別させられるのである。即ち、「おさんの悲劇」が構想されていると捉えられるのである。

「意見」の場面を繰り返すという構想は、「女どしのぎり」という劇の推進力を組み込む事により、小春とおさんの各々の悲劇を展開させていったのである。

注

1 「心中天の網島」における女同士の義理について」（『新居浜工業高専紀要』昭和40年3月・白方勝、後『近松浄瑠璃の研究』（平成5年9月刊・風間書房）に再録）、「近松における「義理と情」——「心中天の網島」を中心として——」（『実践文学』昭和44年・鳥居フミ子）等。

2 『心中——その詩と真実』（昭和52年3月・毎日新聞社）

3 以後、近松作品の引用は『近松全集』（岩波書店）による。

4 改行及び記号については、諏訪春雄氏が『心中——その詩と真実』の中で分析されたものを基に私に行なった。

（付記） 本稿は北海道大学国語国文学会（平成七年六月十一日開催）で講演したものを基に纏めたものである。